

(目的) 女子就労者が増加する中、そのための条件整備とは別に、就業が子供の発達にどのような影響を与えているかが、これまでの一つの研究課題とされてきた。本研究はこうした視点から、母親の就労形態別に子供の学校生活面及び母親と子どもとの意識面を比較分析していく。

(方法) 小学生54名の、小学校六年間における学校生活面と母親の就労形態別に発達段階に応じて、学業、性格、行動等が時間的にどのように変化したかを探え、母親の就労形態が子どもにどのような影響を与えているかを比較、分析していく。標本は、母親の就労形態による、フルタイム、パートタイマー、専業主婦に大別し、パートタイマーについては更に、祖母が同居しているか否か、母親の働き始めた時期が子供が小学校2,3年か、4,5年か、7つに分類した。また、上記の標本を抽出した集団の母親と子ども242組に対して意識調査を実施し、母親の就労の実態と意識を調査するとともに、学校生活にみる変化がどのような実態と意識によるものかについて検討を試みていった。

(結果) 標本数が少いたため限られた条件の中からはあるが、本研究においては、母親の就労が、子供の学校生活から見た成長、発達にマイナスの影響を与えているとは認められず、むしろ就労している母親の子供の方が良い結果をもたらしている事が明らかとなった。また、パートタイマーの子供については、特に「寛容・協力性」が良い傾向が現れている。母親が就労することの良い影響がもたらされたと思われる。全体として男子、中でも専業主婦家庭の男子について問題が多かった。